

先見えぬ暮らし 心のケア必要

関西に避難してきた東日本震災の被災者や避難者らが、慣れない土地での暮らしや先が見えない今後への不安を軽くしようと、被災者同士が胸のうちの語り合ったり、編み物の出前教室を開くなどの動きが関西で生まれてきている。原発事故の不安などから幼い子どもを連れて京都に滞在する人たちが多く見られ、今後も多彩な心のケアが求めらる。

(行司千絵)



出前教室を計画している梅村マルティナさん。手前は「腹巻帽子」(京都市中京区)

「セラピー効果ある」 独出身女性が出前編み物教室計画

「編み物を通して、少しでも気持ちを楽に」。京都市内で編み物教室を開く梅村マルティナさん。中京区には関西に滞在する被災者を対象とした無料の出前編み物教室を開く。

梅村さんはドイツ出身。アフガニスタンの女性や子どもを支援するため、2006年から手編みの靴下を販売して得た収益を寄付する活動もしている。

子どもの春休みで一時帰国していたドイツから日本へ戻った翌日、東日本震災が起きた。「ショックでした」。ドイツから再度、帰国を促す声が寄せられたが、避難所で長い行列のなかじっと待つ被災者の姿に胸を打たれ「日本に残り、何か役に立つことをしたい」と出前教室を思いついた。

教室では指だけを動かすドイツ式の編み方を用い、欧州ならではの色彩豊かな毛糸を使って腹巻きや帽子などに使える「腹巻帽子」を作る。「編み物は気持ち落ち着かせる効果があり、ドイツではセラピーに用いられている。ものを作るうれしさに触れてほしい」と願う。被災者が関西での知り合いを増やせるように、教室仲間の有志も手伝う。

受講料・材料費とも無料。